

R・H・ロツツェと清沢満之

樋口章信

清沢満之の初期思想、とくに西洋哲学との関連はあまり研究されてきたとは言えない。ロツツェの代表的著述の一つである『形而上学 (Metaphysik)』を、清沢は東京・哲学館において講義した。そのテーマは『純正哲学』である。しかしこの事実は従来あまり重く取り上げられてはおらず、カント以降のドイツ観念論を代表する一人であったR・H・ロツツェ (Rudolph Hermann Lotze・一八一七—一八一八) の哲学が、清沢の事物観、世界観の基盤を形成しているということはまだ周知されていない。

そもそも哲学という言葉は、明治十七年当時においてまだ日本の思想界に定着していなかった。哲学会 (明治十九年の終わり頃には会員も六六名に達している) が、西洋思想の導入・研究における重要な機関となったのであるが、明治二十年二月に初版が発行された『哲学会雑誌』に、

「先づ哲学其の物の意味を明らかにする事が、哲学会雑誌初号以来の努力であつた」と伝えられている。東京大学哲学会会員ですらその哲学という概念について共通理解をもつていたわけではない。清沢はまずこの雑誌で『哲学定義集』の作成を担当した。

日本の明治中期も欧米における傾向と異なることなく、十九世紀の唯物論的、進歩主義的、開発主義的、無神論的思潮や、機械主義的、実利主義的思潮の影響を受けつつあった。理性中心的世界観の結果生ずる発展信仰・開発主義・物質中心主義が世界各地で見られるようになっていた。このような世界の思想的趨勢に清沢は危惧を感じていたであろう。東京大学哲学科在籍時代、ならびに哲学館評議員時代に、事物の実在について探究しようとしていたのは、そのあたりがひとつの動機になっていたと考えられる。

ヨーロッパにおいてそのような物質主義的傾向に早くから反対していたのが、ロツツェである。彼は哲学者であると同時に医学者でもあった。近代科学を疎遠にしない彼の形而上学は、事物の根源的構造・機能の解明をめざす。このようなロツツェの形而上学 (純正哲学) 理解をとおして、清沢は統一的事物に即する独自の靈魂観を形成していった。事実、清沢はその哲学について「氏は最近世の大家にして、

その説を立つるや、唯心に偏せず、唯物に局せず、常に二者の中庸を取り、其の調停を期し、特に理科学の幽奥を探り、其の原理を究明するを以て哲学の要点となせり。故に科学全盛の今日にありては、最も講究すべき説と云はざるを得ず。」と語っている。そこでは精神というものを超越的に考えず、内在的な存在としての精神原理が帰納されていったのである。

ロツツェはヘーゲル以降のドイツにおける代表的な体系的哲学者と形容された人物である。彼は形而上学、倫理学、心理学等の領域において精神主義にもとづく、精神内在的哲学を打ち立てた。彼は一八七一年に三部構成の哲学体系組織に着手する。第一部『論理学』、第二部『形而上学』、そして未完に終わった第三部には、実践哲学、美学、宗教哲学が含まれる予定だったという。満之はこの第二部『形而上学』の「存在論」を講義した。「形而上学」は「Ontologie : 存在論 (満之は本体論、あるいは実在論と訳す)」、「Kosmologie : 宇宙論」、「Psychologie : 心理学 (満之は心靈論と訳)」の三部から成る。その英訳はオックスフォード大学教授ボーズンクイット (B. Bosanquet) によって監修され、一八七九年に出版されている。第一部「存在論 : *Vom Zusammenhang der Dinge* (事物の關係に

ついて)」の英訳は同大学教授グリーン (T.H. Green・一八三六—八二) が担当した。清沢が主として依拠したのはこの英訳本である。ロツツェが逝去するのは一八八一年であるが、早くもその六年後、一八八七年 (明治二十年) に、その思想の一部『形而上学』が、前述のように東京の哲学館において満之によって講義された。

清沢は『純正哲学』・「緒論」で、「純正哲学は変化ある実体を研究す。変化とは、事々物々の生滅、起伏、隠顕、出没するを云ひ、実体とは宇宙の間に顕現羅列する万有を云ふ。細言すれば、無にあらざりて有なる「物」、起らざるにあらざりて起る「事」、存在せざるにあらざりて、実在する「関係」、此の三者は皆な実にして虚にあらざ。或は之を称して現象と云ひ、(中略) 純正哲学は、予想と実験事実との撞着より起る者なり。(カギ括弧筆者)」と説明する。『純正哲学』の内容は三分され、「内外貫通の原理を考究す」る実在論、「外界顕象の原理を考究す」る宇宙論、そして「内界顕象の原理を考究す」る心靈論となる。どのようにロツツェを翻訳・解釈しているかを『形而上学』と『純正哲学』を比較・検討することによって把握すれば、満之の思想形成過程の一端を読みとることが可能となる。清沢の『純正哲学』において、物質 (matter) は、実体

(substance) あるいは実在 (reality) として捉えられる。実在とは「真実に存在する事を指す語」であると規定される。実在については、純正実在 (pure Being) と経験実在 (determinate Being, empirical Being) の二つがあると考えられたが、我々の宇宙万化の説明に益する概念は経験実在である。経験実在は「変化するもの」であり、我々の感覚をおしてその変化が経験的・実験的に認識されるものである一方、純正実在は経験実在と区別するために抽象的に立てられた、いわば方法的概念である。事物の関係、すなわち有規連絡 (a relation of mutual dependence between things according to law・der Zusammenhang im Laufe der Dinge) が見いだされるのは経験的実在による。実は die Einheit der Dinge, つまり事物の統一性 (清沢の訳したところでは「万物一体」) において、隙間とか間隔という意味を指示する「間 (between・among)」という概念は存在しない。統一性とは内部・部分間の交互動作そのものを指す。die Einheitはいわばアリストテレス言うところのデュナミス (dynamis) であると同時に、エネルゲイア (energeia) である。Ontologyのテーマは「事物の関係について」(Vom Zusammenhang der Dinge, On the Connexion of Things) であつた」とは注目される。清沢

は「形而上学」において事物の実在を問ひながら、事物の統一体内部に存在する、「交互動作 (die Wechselwirkung)」運動としての精神を解明しようと考へたのである。R・H・ロツツェは、合理性、経験性、人格性、精神性を重視した。清沢においても哲学と宗教は相互に切り離せない関係にある。それぞれの側面における強調の程度が変化することはあれ、理ないし知的側面と靈魂的側面は常に相互に不即不離の関係にあつた。知性的認識や理性的分析によつて、宗教は誤謬や迷信から解放され、同時に、信念によつて媒介される総合的人格において、その分析的世界に意味と生命が与えられる。大きく見れば、清沢の一生は理的側面を實踐する時期から、事的側面を實踐する時期へと展開する。哲学的思考によつて事物存在の筋道を入念に辿るといふ、その実践的行為自体が「不可思議」なる「信」の事実の一側面であることを知つた清沢は、知の限界を知りながらも、最大限に知性を尽くしつつ、大谷派を場に借りた教育的実践を通じて人間の事象の渦中に飛び込んだ。しかし彼は、諸々の挫折のなかでも決して最後まで「哲学すること」を捨ててはいない。彼の関心は体系を構築することにはなく、事物の「妙用に乗託す」べき自己を人々と共にあきらかにすることにある。だからこそ最

後まで迷信を避け、普遍理性（道理心）や経験言語、そして社会同朋との共通の広場（*sangha*）を大切にしたのであつた。

戦国期真宗信仰の持質

——安養寺慶念『朝鮮日々記』から——

大 桑 齊

慶長二年、豊臣秀吉の第二次朝鮮征服戦争に、従軍を強制された豊後臼杵の真宗僧侶、安養寺慶念の『朝鮮日々記』は、内藤雋輔によって学界に紹介され（『朝鮮学報』35）、藤木久志が「厭戦と信仰告白の書」と呼んだ（小学館『日本の歴史』15）ことで有名となり、平田厚志がその心の軌跡を「うき世」から「みやこ」への旅路としての「従軍」として分析を加えた（『季刊日本思想史』48所収、同名論文）。これによって、『日々記』はいまや思想史のテキストとなった。内藤・平田においては、業縁の深さの自覚から本願の救済を確信する真宗信仰の故に「希に見る敬虔な仰者」と、高い評価が与えられている。しかしながら、このような信仰は、全ての状況を、日本軍の残虐行為も、往生への機縁と捉え「うき世」の習いとしてしまうことになり、「厭戦」といわれるのもその延長上であれば、その